

## 教員免許状更新講習 2016

### コミュニケーション・スキルアップの3日間！

#### レポート

京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター 講師・研究員  
北野 諒

---

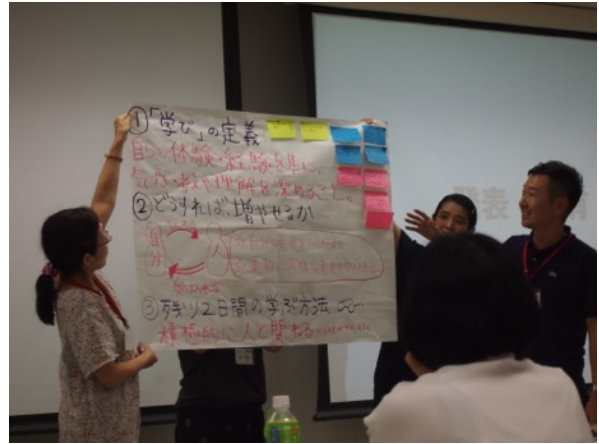
他人に対して当たり障りのない言葉で話すこと、何をされても笑顔でいること。  
それが良いことであると思って生きてきました。

——これは、ある学生が入学当初に書いた文章である。3日間の講習は、子供たちが「コミュニケーション」をどう捉えているかという現状を共有するところからスタートしたのだ。そこから「現代の子供たちは極端に他者とのコミュニケーションを恐れている。コミュニケーションの技術だけでなく、どのように伝えたいという気持ちを持ってもらえるかが重要ではないか」という問題提起がなされ、これにいかに応えられるだろうかということが、3日間の大きなテーマとなった。



イントロダクションに続いては、「鏡をみながら逆さまの世界を歩く」「目隠しをした人に絵を言葉で伝える」という2つのワークショップが実施された。鏡の体験では「**上のみを写して歩行するのは難しく**」「**パートナーとコミュニケーションをとらなければ危険**」であり、「**他者の存在の重要性**」を実感していただけなのではないだろうか。新しい見方や考え方に飛び込むときに不安を感じるのは、子供たちだけでなく大人も同様である。そこで他者を受け容れて協働できるかどうか、コミュニケーションにおける一つの要となってくる。

また、目隠しの体験では「**相手の知識や経験の違いによって伝わり方が異なり**」「**4割ほどしか伝わっておらず**」、「**自分の中の先入観でわかりやすいだろうと思い込んでいた**」という気づきが多数生まれていたようだ。教室の中では、つい「正解を知っている教師」と「知らない生徒」という立場が固定化してしまう。お互いが対等にわからないこと・知りたいことを聴きあえる関係性の構築が、「伝えたいという気持ち」を耕す第一歩である。



午後からは「マンガ読解」。マンガ作品をグループで2時間かけて読み解いていくワークショップである。「今の立場や生き方から限定した見方をしていることにも気付かされた」が、「グループの先生方の発言から視野が少し広くなり」「他者とのコミュニケーションにより多面的にみえてくることを実感」していただけたようだ。これは実際に子供たちと接する場面でも同様である。「教室に遅れて入ってくる生徒に対して、遅れてきた事実のみに目を向け、わざわざ遅れなくてもいいのに遅れてきた」ことをみようとしていない、といった事例を挙げ、学校現場のコミュニケーションと結びつけてくださった先生もおられた。

1日の締めくくりとしては、グループディスカッションによる振り返りと、小論述が行われた。本講座では「みる・考える・話す・聴く」という4つのプロセスからコミュニケーションを学んでいくが、1日目は特に「みる」ことに力点を置いたプログラムだったといえるだろう。「『みえているつもりでみえていないもの』を探し続ける姿勢こそが真に『学ぶ』ということであり、コミュニケーションの役割とはまさに、その『みえていない何か』を見つけることにある」のだ。



2日目はレクチャー「みることから始まる、作品そして他者とのコミュニケーション」からスタート。対話型鑑賞（ACOP）についての概論でもあったが、それ以上に全ての教科につながる根本的な学びについてのレクチャーでもあった。「講義での、一つの到達点・正解を決めてしまうとそこで終わってしまうという言葉が、全てにつながった」「考えること・理解しようとする気持ちを止めてしまえばそこで人との関わりは絶たれ、生み出すものもなくなる」というご感想にもあるように、アートとは、そして学びとは、絶え間なく続く「みることから始まる疑問、そして発見と驚き」なのである。

続いて午後の始まりはワークショップ「聴く・応答する」。相手の発言の意図を確認しながら会話をするというシンプルなワークではあるが、かなり鮮烈な体験として受け止めていただいたようだ。「今まで何十年間も人の話をあまり聴いていなかったな……」という衝撃から始まり、「相手の言わんとすることを拾うために想像力を最大限に活かし」「相手への思いやり、尊重する気持ちがないと成立しない」「受動的であるようで実は能動的」な行為として「聴く」を捉え直す時間となった。「応答によって正解は変わるし、実は言葉のキャッチボールはキャッチの方が大切」であることが体感できたのではないだろうか。

これらのレクチャーとワークショップを踏まえ、いよいよ対話型鑑賞（ACOP）を3グループに分かれて体験。2作品を1時間半かけてじっくりと鑑賞していった。「ACOPは『聴く』と『学ぶ』の連続で、コミュニケーションが苦手な私が、コミュニケーションをとることは怖くない、楽しいと感じられた人生が変わったワークショップだった」。

2日目の終わりにも、1日目と同様、振り返りと小論述を行った。「この仕事をしてから、どれだけ勝手な解釈をしてきたことか。『この前に言ったでしょ』攻撃は、かつての生徒たちに伏して許してもらわなければならない」という率直なご感想を始め、2日目になると「いかに子供たちに学ばせるか」という観点から「いかに自分たちが一人の学習者としてあるべきか」という観点へと、先生方がシフトしつつある様子がみえていたように思う。「私は毎日みているし聴いている、とっていたというのが、2日目の正直な感想だ。自分の『生きる力』を考え直す時間となった」との言葉にあるように、生徒たちに強いるのではなく、私たちはまず自らの「生きる力」を問うべきなのだろう。



3日目の午前、ゲスト講師として三重県総合博物館から大野照文 館長をお招きし、ワークショップ「貝体新書 -おとなが学ぶ二枚貝 -」を実施した。ハマグリとシジミの貝殻をグループで観察し、お互いの意見を対話しながら深めていくという内容であり、いわば対話型鑑賞の「応用編」として他教科で活かせる事例の紹介となったのではないだろうか。午後からも、「古地図を対話型鑑賞しよう」と題したワークショップを行い、3日目は理科・社会と横断的な展開を体験していただいた。

その後、講習の総まとめとしての振り返りを行い、先生方には学校現場で学びを生かすための「方法」を考えていただいた。3日間の講習から、先生方にはどのような学びを得ていただけただろうか。いくつか、最後の小論述から講習全体へのご感想を紹介したい。

**「コミュニケーションスキルアップを図るのは、子供たちではなく、まずは私、教師自身だということはこの3日間で痛感した」**

「入学したばかりの生徒から『もう諦めてん』という言葉が聞かれます。そう感じさせる体験をさせてしまっている教育現場があるのでは……。より良い方向に変化させるには、まず自分の変化を恐れないことだと実感しました」

「教員らしくふるまおう、と心がけていたことも、形だけのコミュニケーションでしかなかったことに、この講習で気付くことができました」

「私の3日間は、私自身が自己変容していく3日間でもあったと思う」

「ワークショップを重ねるごとに、他人の意見を聴くことの喜びをもしかしたら初めて味わったかもしれません」

「私の人生において、とっても価値のある3日間でした。免許更新どうしようかな～と言っている3か月前の私に、絶対この講習選びや！と言います」

本講習で行われたディスカッションの中では、「学びとは行動の変容である」というテーマが示されていた。指導要領の改訂、2020年の大学入試改革、アクティブ・ラーニングの導入……。まさに教育界はいま激変の波に揺られているところではある。これが形骸化した「変わったつもり」に終始するのか、本質的な変化をもたらすものになるのかは、まさに私たちひとり一人のこれからの変容に懸かっているのだ。

